

公表	事業所における自己評価総括表
----	----------------

○事業所名	放課後等デイサービス ひかり富久山教室		
○保護者評価実施期間	令和8年 2月 2日	～	令和8年 2月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数) 30名	(回答者数)	
○従業者評価実施期間	8年 2月 2日	～	令和8年 2月 10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数) 7名	(回答者数)	7名 (回収率: 100%)
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 3月 9日		

○ 分析結果

	事業所の強み (※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子ども達が安心感を持ちながら、楽しく通所できている (子ども達・保護者の満足度が高い)。子ども達に寄り添った共感的な支援が出来ている。また、こどもの気持ちに寄り添った声掛けを大切に、安心できる関係づくりを心がけている。	・当所時の表情や様子を丁寧に観察し、その日の気持ちに合わせた声掛けをおこなっている。 ・否定ではなく受容を基本とし、「まず気持ちを受け止める」関わりを職員間で共有している。 ・一対一で落ち着いて話せる時間を意識的に確保している。	・より一層こどもの思いや特性を深く理解するために、職員の支援者としての知識や技能を高めるため、アセスメントの充実と職員間のケース検討の機会を増やしていく。 ・共感的支援の質を高めるための内部研修や振り返りの時間を確保し、支援の統一と専門性の向上を図る。 ・保護者との情報共有をより丁寧に、家庭と事業所が同じ方向で支援できる体制を強化している。
2	中高生限定の事業所であるため、思春期特有の心身の変化や不安定さを理解し、安心できる関係性づくりを大切にしている。今後も個々の背景を丁寧に把握し、より安定した支援に繋げていく。	・思春期の年代ではあるが、精神年齢や理解力に個人差が大きい利用者さんも多いため、実年齢にとらわれず一人ひとりの発達段階に合わせた関わりを大切にしている。 ・難しい言い回しは避け、具体的に分かりやすい言葉がけや視覚的な工夫を取り入れながら安心して過ごせる環境づくりを行っている。 ・気持ちが不安定になる場面では背景を丁寧に考え、職員間でこまめに共有しながら、ぶれない対応を心がけている。	・子ども一人ひとりの認知特性や情緒面の傾向をより丁寧にアセスメントし、具体的に実行可能な支援方法へと落とし込めるようにケース検討の機会を定期的に設けていく。 ・思春期と発達特性が重なる難しさを踏まえた研修や事例共有を行い、根拠に基づいた支援の質の向上を図る。 ・日々の小さな変化を職員間でこまめに共有し、家庭・学校とも連携を密にし、環境面も含めた包括的で、より安定した生活と自己肯定感の向上につなげていく。
3	卒業後の進路に対する保護者の不安に寄り添い、相談しやすい関係づくりを心がけている。今後も安心して相談できる環境を整えていく。	・卒業後の進路を見据え、日頃から本人の得意・不得意や作業面での特性の把握、また対人面の特性を把握し、将来の自立や就労につながる視点を意識した支援を行っている。 ・就労移行支援・就労継続支援B型・生活介護等の情報収集を積極的に行い、具体的な選択肢を保護者へ分かりやすく提案している。 ・子どもや保護者の不安や迷い、進路に関する不安については丁寧に寄り添いながら、関係機関と連携し、卒業後も見据えた継続的なサポート体制づくりを心がけている。	・就労移行支援・就労継続支援B型・生活介護等の制度や特徴について、保護者が具体的に理解できるよう説明の機会を充実させていく。 ・個別面談の機会を増やし、進路する不安や迷いを早期に共有できる体制を整える。 ・関係機関との橋渡しを積極的に行い、保護者が一人で抱え込まず、安心して進路選択ができる支援体制をさらに強化していく。

	事業所の弱み (※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・保護者様同士の交流の機会が少ない。 ・父母の会や保護者会の開催、またきょうだいの交流会を設けることができない。 ・ペアレント・トレーニングや研修会・情報提供の機会が乏しい。	・父母の会や保護者会・きょうだいの交流については働いている保護者も多く、曜日や時間の設定が難しいため開催できていない。 ・個別相談や情報提供は積極的に対応しているが、家族を対象にした支援プログラム等の実施には至っておらず、今後の検討課題である。	・まずは保護者に事業所行事や活動の様子を見学していただく機会を設け、事業所理解と安心感の向上を図る。見学を通して保護者同士が自然に顔を合わせられる場をつくり、交流のきっかけづくりとする。 ・児童発達センターからの研修案内があった場合は保護者へ情報提供する。 ・ライフステージに応じた情報提供や講演会が行えるように検討する。
2	・地域の他のこどもとの交流会が不足している。 ・放課後児童クラブや児童館との交流や、地域の他のこどもと活動する機会があまりない。	・利用児童が中学生・高校生のため、交流は社会との接点を増やすこと (地域の公園の利用やお店の利用等) を中心としており、放課後児童クラブなど団体同士で直接的な活動の機会は設けられていない。	・子ども達・保護者の要望を伺い、他事業所の取り組みを参考にしながら、必要とされている交流の方法等を検討する。
3	非常災害の発生に備え、定期的に避難、救出その他、必要な訓練を行っているが、把握できていない保護者がいる。安心して利用してもらえよう随時伝えていく必要がある。	訓練の日程や内容は「連絡帳」や「ひかり通信」や「送迎時の申し送り」にて、その都度周知しているが、情報発信の方法が分かりにくい可能性がある。	・一定の保護者に個別に説明させていただく他にも、別の手段で情報発信をしていけるか検討を行う。 ・より多様な災害想定や緊急時の個別対応を踏まえた訓練内容の検討が課題である。 ・保護者が安心して事業所に送り出すことができるよう職員の研修や訓練等の実施についても情報発信していく。